

## < 視リハ協だより 2002年度第1号 >

### = 第11回視覚障害リハビリテーション研究発表大会速報！ =

去る6月15日(土)・16日(日)の2日間、横浜市上大岡の「ウイリング横浜」を会場に「第11回視覚障害リハビリテーション研究発表大会」が、「福祉機器展示会」と併せて開催されました。「研究発表大会」の参加者は210余名、「福祉機器展示会」来訪者は延べ603名でした。

今年は両日にわたり口頭発表16題、ポスター発表17題の発表が、そして6つのワークショップが催されました。15日の午後には「第11回視覚障害リハビリテーション協会総会」が行われ、各報告・計画と決算・予算が承認されております。また、原田会長から今年度中の事務局移転の予定に関する重要な報告がありました。

15日夜の懇親会には約80名が参加され、会員間の熱心な議論や親睦が各テーブルで見られました。

なお、「口頭発表」と「ポスター発表」については「第11回視覚障害リハビリテーション研究発表大会論文集」を、「第11回視覚障害リハビリテーション協会総会」・各ワークショップ・「福祉機器展示会」については、下記の報告をそれぞれ御参照下さい。

#### 定期総会報告

第11回視覚障害リハビリテーション協会総会は次のような内容で進行しました。

##### 1 会長挨拶

当協会は視覚障害リハに携わる人たち相互の情報交換の場であり、会員相互が強く結ばれる必要があること、会員による自主的な事業展開の中で互いに共有できるものが少なかったこと、会費の納入率が低いこと、事務局移転を含めた事務局体制の強化を検討していること、リハ活動が活発になるように役員も努力し会員の協力もお願いしたいという挨拶がありました。

##### 2 議長選出

議長には国立身体障害者リハビリテーションセンター中西勉氏が、書記には日本ライトハウス服部純子氏と鳥取県立盲学校の本岡佐知子氏が指名されました。

##### 3 定足数の確認

委任状提出者125名、総会出席者76名、合計201名で過半数189名(昨年度会費納入者377名)を超えており、規約に則って総会の成立が確認されました。

##### 4 議案

###### 第1号議案(2001年度事業報告)

名簿に関して、会員相互の連絡にのみ使用し他者に流用しないよう確認。

第2号議案(2001年度決算報告)並びに会計監査報告  
拍手により承認。

第3号議案(2002年度事業計画案)並びに第4号議案(2002年度予算案)質疑応答が一件あったほか、拍手により承認。

Q: 予算案支出の部、事務局費の通信費と会議費がアップとなっているが具体的に何を  
するためですか。

A: 通信費は名簿の発送費、会議費は電子メールによる役員間の連絡ではなかなか意  
志疎通が図れないこと、事務局移転のこともあるので2001年度より増やす必要  
があるためです。

## 5 フロアから

リハビリテーションの場にはいかに中途失明者本人を導いていくかが非常に難しいこと  
なので、リハ関係者が医療分野と交流し、また協会が医療を導いてほしい旨の要  
望がフロアから発言されました。原田会長より、重要性は認識しているが、大きな会を  
つくって上から下ろしていくのは難しく、地域でリハ関係者が連携してほしいとの説明  
がありました。それに対して発言者からも、広島で行動を起こしていこうと計画してい  
るものの、行政に対する発言力が弱い。しかし、当事者としての努力を続けていき  
たいとの弁がありました。会長からは高知県の例(口頭発表)を参考にしてみてもどうか  
という回答がありました。

## 6 議長解任

引き続き副会長より閉会の挨拶。今年度の定期総会は幕を閉じました。

(文責: 加瀬満代)

## ワークショップ報告

### グループ1 「視力・文字認知・読書とその障害」

東京女子大学コミュニケーション学科 小田 浩一

視覚機能の程度をはかる視標としてのランドルト環、スネレン文字、最近ではスロー  
ン文字、日本ではひらがなカタカナ、縞模様、市松模様などあるが、それぞれで測定値  
が異なることをあらかじめ理解する必要があり、また得られた視力は、どの距離でどの  
くらいの大きさのものが見えるかを推定するために利用できるという内容のことが話さ  
れました。

さらに、単に見えることだけではなく、快適な読み速度も大切であるということをも  
とに、「ひらがな視力限界体験チャート」と「日本語読書限界体験チャート」を、実際に  
体験しました。体験をとおして、いくら文字が見えてもその文字では十分な読書速度が  
出ず、自分にとって快適なものであると言い切れないことを実感し、今後の視標の利用  
と素材作りを考えさせられました。参加者数は46名でした。

(文責: 棚橋公郎)

### グループ2 「TV 機能付き携帯電話(FOMA)による視覚障害者への遠隔支援 - テレサポート NETの取り組みについて - 」

日本点字図書館評議員 長谷川 貞夫

日本点字図書館ボランティア 古川 愛子  
福島県立盲学校 伊藤 総知  
筑波大学付属盲学校 雷坂 浩之

昨年10月にNTT Docomoより発売されたTV機能付き携帯電話を利用して、どのように視覚障害者の外出がサポートできるのか、その方法と課題についてのワークショップには、58名の参加者がありました。

視覚障害者が外出先で、ちょっと誰かの目を借りたい時（例えば駅の券売機で切符を買う時や、目指すお店の入口がわかりにくい時など）、携帯電話を使って目の前の様子を画像データとして晴眼者に送りサポートを得る、という方法は、目からウロコのな携帯電話の使用方法と言えましょう。通話料が高額になる点、サポート・スタッフが少人数のため「いつでも、どこでも」利用できる状況ではない点などの課題は見受けられましたが、参加者からは「会場の参加者の顔は何列目ぐらいなら識別できるか」「缶詰のラベルは読み取れるのか」「口紅がうまく塗れているのかチェックできるか」といった関心の高さをうかがわせる質問も出されました。システムとして確立されれば、視覚障害者の外出を支援する一つの方法として期待できるものとの認識を多くの参加者が持ったのではないのでしょうか。(文責：久保ますみ)

### グループ3 「簡単なハンドルーペ選定法 - ルーペ選定の基礎 - 」

国立身体障害者リハビリテーションセンター学院 小林 章

123号室にはハンドルーペを選定する方法についての話題に48名の参加者が集まりました。

前半は選定する上で必要な倍率、調整力、焦点距離の知識についての基礎的な説明があり、後半は実際の場面を想定した練習問題に取り組む形で行われました。

参加者と実施者、あるいは参加者間で互いに教え合う場面が多く見られ、和やかで有意義な時間を過ごすことができました。(文責：小坂瑞穂)

### グループ4 「障害の重複化、多様化と専門家の役割 - 総合的情報支援技術の必要性 - 」

慶應義塾大学 中野 泰志

香川大学 中邑 賢龍

財団法人ニューメディア開発協会 山田 栄子

視覚障害の専門家である中野氏が養護学校に行って重度の障害を抱えた子どもを見ると、実に4割近くの子どもの視覚にも何らかの問題を抱えているといます。もしも視覚の専門家が見る機会がなければ、こうした子どもたちの抱える視覚の問題は見落とされていたかもしれません。逆に、視覚の専門家はどれくらい他の障害について知っているのでしょうか？視覚以外の障害を併せ持つ障害児・者が相談に来た場合、視覚という観点でのみ見てしまうがために見落とされている問題はないのでしょうか？

重度・重複の障害を抱える子どもが多くなった今、支援者には専門性ととともに障害に対する総合的な知識が求められるようになっていきます。このような総合的な見方ができ

る支援者の育成のために、財団法人ニューメディア協会では支援技術のテキスト・ビデオを作成し、研修会を開催しています。昨年より始めたこの取り組みは、支援技術者として1級から4級の検定資格を定めるという方向に動いているといたします。

後半では、横浜訓盲学院、日本ライトハウス、東京都盲人福祉協会、長崎三島眼科などから重複の障害を併せ持つケースに関する報告もありました。

70名ほどが参加し、時間が足りないと感じさせる充実したワークショップでした。

(文責：岡田 弥)

#### グループ5 .「盲ろう者のリハビリテーション」

長崎県身体障害者更生相談所 永井 和子

高知県身体障害者連合会 別府 あかね

鹿児島県視聴覚障害者情報センター 良久 万里子

日本ライトハウス視覚障害リハビリテーションセンター 鶴見 朝子

盲ろう者のリハビリテーションに関して各地での状況を報告しあい、情報交換をしようというワークショップには、33名の参加者がありました。まず、高知・大阪・鹿児島・長崎のそれぞれの場から、今行われていることの報告がありました。

高知ではまだ盲ろう者友の会もなく、何もない状況であるが、今年度から盲ろう者向け通訳介助者養成講座が実施されること、盲ろう者の体験ツアーが行われるとのことです。大阪からは、ろうあ者福祉指導員と共に行っている訪問指導の場での状況や課題が報告されました。鹿児島では、盲ろう者のコミュニケーション講座や、通訳介助養成講座がスタートしています。長崎では福島智さんの講演をきっかけに交流会が始まり、6年ののちに、盲ろう者主体で友の会が立ち上げられたとのことで、各地域とも様々な道のりを経て今日につなげてきている様子がうかがえました。

また、会場からも各地でのいろいろな関わりが報告されました。その中で、聞こえる聞こえないに関係なく語りかけの必要があること、知的障害があるといわれる人にも疑問が残ること、理解されることが難しく就職も難しいこと、講習会で手引きのルールをどのようにしているかということ、訓練施設で断られることが多いことなど多彩な話題が出てきて、それぞれに会場の中から励ましやアドバイスが送られていました。集まった方々の関心は非常に高く、関係者が交流し、質問し合える良い場の提供になったのではないのでしょうか。(文責：服部純子)

#### グループ6 .「盲学校による歩行指導 - いつ何をすべきか・何ができるか - 」

国立身体障害者リハビリテーション学院 小林 章

山梨県立盲学校 鈴木 あかね 白倉 明美

栃木県立盲学校 河又 克幸

はじめに、小林氏より、「視覚障害者の歩行訓練として何を教えれば歩けるのだろうか?」と問題提起があり、運動としての要素(Mobility)と認知における要素(Orientation)の確立が重要である旨説明がありました。この二つの確立のためには、

歩行姿勢が獲得されていることが重要であり、先天性視覚障害の場合、乳児期からの関わりが重要であるということで、山梨盲学校での乳幼児期からの取り組みについてビデオによる事例発表がありました。8ヶ月から関わり、仰向けで目押しをしていた女兒が、あそびを通して総合的に発達していき、後ずさりや音の出るおもちゃを探したり、だっこで壁に触りながら教室移動をしたり、伝い歩きをしながら学校探検をしたりするまで発達していく感動的な、しかし、一つひとつステップをきちんと踏んだビデオでした。栃木盲学校からは、寄宿舍でのあそびを通して感覚機能や運動機能の発達をめざした取り組みや、外出体験の報告がありました。

フロアから、各盲学校での取り組みについて積極的な発言があり、音や触覚に関する環境整備の必要性や、親への支援の重要性、プリケーンの活用等、意見が交わされました。

最後に「いろいろな年齢層に対応できる歩行訓練士をめざし、リハと盲学校の情報交換をしていきたい」旨、小林氏より発言があり、70名近く参加があったワークショップは閉会しました。(文責：加瀬満代)

### 福祉機器展示会報告

今年度も研究発表大会と併行して、会員および一般の来場者に対して最新の機器の情報提供を目的とした福祉機器展示会を開催しました。一般来場者向けには、各種メニューリストやラジオを通じて案内しました。

今回の出展企業数は過去最高の34社でした。また、新商品も多く、大勢の関心呼びました。2日間で延べ603名(15日：359名、16日：244名)の来場者を記録し、所期の目的は十分に達成できたのではないのでしょうか。(文責：園 順一)

### アンケートから

以下は、ワークショップを除く各プログラムに関するアンケートの結果です。

第11回視覚障害リハビリテーション研究発表大会 アンケート結果 (n=56)

	口頭発表		ポスター発表		機器展示会		大会全体	
	人数(名)	割合	人数(名)	割合	人数(名)	割合	人数(名)	割合
大変よかった	7	12.5%	8	14.3%	11	19.6%	8	14.3%
よかった	28	50.0%	30	53.6%	28	50.0%	33	58.9%
まあまあ	19	33.9%	16	28.6%	15	26.8%	14	25.0%
よくなかった	0	0.0%	2	3.6%	0	0.0%	0	0.0%
その他	1	1.8%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
無回答	1	1.8%	0	0.0%	1	1.8%	1	1.8%
見ていない	-	-	-	-	1	1.8%	-	-

自由筆記欄からいくつか紹介します。

「視覚リハに関して多岐に渡る研究の成果、また研究者自身に触れることができ、たいへん勉強になりました。ただ、発表には専門用語が多用されており、理解しにくい人も

おられたのではないかと思います。プロジェクトを利用しての発表の際も、これ、ここなどの指示語が目立ちましたので、視覚障害者にも分かりやすいよう、具体的な名称を使って説明されると良いと思いました」

「同じような内容のワークショップが同時に行われていますが、できれば別々にして欲しいです」

「ワークショップのように気軽に発言でき、意見、情報の交換が活発にできる場もあり、面白く感じた。これが実務的なものになっていくと思う」

「地域交流も含めて、日本各地で大会を開催して欲しい」

「いろいろな職業の方がいるので、もっといろいろな話を討論できる場を作ってもらえたらと思います。機器展について場所をもう少し広くとってほしい。視覚障害の方がみえているので特に気をつけてほしい面がありました。ワークショップも多様にして、少人数制でやられるともっといろいろな話ができるのではないのでしょうか。障害者の方も多く参加されているので、ぜひその方たちの意見を聞ける場も作ってほしいと思います。これほど多様な方々が所属されている会はほとんどないのでもっと協会としてアピールをしてほしいと思います。また、交流の機会も地域別などでとれるようお願いしたいと思います」

「参加者の中に若い顔触れも多く、楽しみです。様々な発表と情報交換がなされる毎回の大会に参加させていただいて8年、ふと我に返ると、現場はただただ何も変わらない、望ましい進展のない我が業界の肩身の狭さであるのかなと思います。指導員も多方面にわたる知識を習得しレベルを上げ、加えて他の職種の方々に認めてもらえるために、もっと現実的な交流、意見交換（例 PT、OTとの交流、講演会など）の場作りを望みます」

#### 編集後記

総会ならびに研究発表大会ありがとうございました。ここに大会速報をお送りいたします。

大会後に、「参加してよかった」という感想をいくつかお聞かせいただきました。すべてが変化の渦中です。ひとり辛いし厳しいです。視覚リハに携わる者にとって、協会活動は大きな、かけがえのない財産です。これを、皆さんからいただいた元気で、今後とも守り、育てていきたいと思ひます。

役員一同は、たくさんの課題解決に向けて、新たなスタートを切りました。御指導御協力をお願いするとともに、会員皆様の益々の御健勝と御活躍をお祈り申し上げます。

原田 良實